



緊急避難施設としてJICAの支援で建設されたコミュニティービルでは、住民たちと地域の防災への取り組みなどについて意見交換

## 世界とつながる 教室

# インドネシアとともに 復興への道を歩もう

東日本大震災後、子どもたちと向き合ってきた東北地方の先生たちが、2004年に地震・津波を経験したインドネシアを訪問。現地の人々との交流を通して、復興へのヒントをつかんだ。



バンダアチエ第一高校で生徒たちの夢を聞くと、「大学に進学し、アチエの復興・開発に役立つ知識を得たい」など、次世代のリーダーとしての意識の高さがうかがえる答えが返ってきた

## 東北地方の先生が 7年前に被災したアチエへ

2011年12月26日。約22万人の犠牲者を出したスマトラ沖大地震・インド洋津波から7周年を迎えたこの日、インドネシアのバンダアチエ市では慰霊祭が行われ、多くの市民が深い祈りを捧げていた。

そんな中、一人の日本人男性が壇上に立った。

「東日本大震災発生後、私が暮らす気仙沼市の避難所には、マグロ船で働くイン

ドネシアの若者も避難してきました。彼らは、何度も自分たちの船から食料を運んでくれたのです。寒いからと毛布を渡そうとしても、大丈夫ですと言って決して受け取らなかった。あの日、インドネシアの若者が日本人のために一生懸命働いてくれたことを多くの人に伝えたい。」

そう力強く話したのは宮城県気仙沼市教育委員会の伊東毅浩さん。「震災からの復興」をテーマにJICA東北が企画した教師海外研修の一環で、東北地方の小学校、中学校、高校の教員22人がこの式典に出席した。

スマトラ沖大地震・インド洋津波から7周年式典でスピーチする気仙沼市教育委員会の伊東さん



「一緒に頑張ろう!」。宮城県内の生徒が書いた応援メッセージを先生たちが持参し、バンダアチエ第二高校の生徒にプレゼント



震災後、笑顔が少なくなった子どもたちと接しながら、どう地域を再生し、復興に取り組みべきなのか、試行錯誤しながら過ごしてきた先生たちもいる。「アチエの復興の様子を伝えることで、子どもたちを含め東北の被災者を励ますことができるのではないか。」「トラウマを持つ子どもたちにどう接すればいいのか。」

「教員自身が前向きでいるためのヒントを、現地の教育関係者から学びたい。そんな思いを胸にこの研修に参加していた。教師海外研修は毎年夏に実施されているが、昨年は震災の影響で中止寸前の状況だった。しかし、「震災で教育現場が立ち止まるものか」という地域の教育関係者の思いに後押しされ、JICA東

北は時期をずらして実施に踏み切ることに。また、先生たちからは震災後に寄せられた世界各国からの支援、人々の温かい気持ちを受けて、「子どもたちに世界とのつながりを自分の言葉でしっかりと伝えたい」という声も多くなった。行き先は、今の東北にとって最も身近ともいえる、2004年のスマトラ沖大地震・インド洋津波で甚大な被害を受けたインドネシアに変更した。

JICAはスマトラ沖大地震・インド洋津波の直後から国際緊急援助隊救助チームを派遣、さらには復旧・復興都市計画の策定や耐震設計による学校の再建など、緊急から復旧・復興への切れ目ないシームレスな協力を行ってきた。その縁もあり今回の研修では、JICAが支援してきた防災関連施設や教育現場の視察、地元の人々との交流も実現することができた。

## 共に助け合っていく大切さを 生徒たちに伝えたい

研修3日目、JICAの支援を受け、津波発生時の緊急避難場所として建設されたコミュニティービルで住民との意見交換が行われた。

「アチエと同じ景色…。あの時のことを思い出します」

数人の先生たちが東日本大震災の写真を見せると、アチエの人々は自分の身に起きたことのように心配そうな面持ちに。原田恵理先生（仙台市立中田中学校）は、「何かあるたびにみんなで集まっ

話す時間が何よりも楽しくて心の支えになっていく」といった言葉を聞き、ハイド面の復興はもちろんですが、コミュニティーや人とのつながりも重要だと感じました」と話す。

4日目には、現地の中学校や、防災教育を取り入れている高校も訪問。その一つが、気仙沼市に約1000通の応援メッセージを寄せてくれたランジャバット第11中学校。同校は津波で大きな被害を受けたが、05年に日本の支援で再建された。「災害後は無理に授業を行わず、運動や遊びなど、生徒たちがやりたいことを取り入れ、学校に来たいと思えるような環境づくりから始めた」という同校の先生の言葉に聞き入る人も多かった。

6日間の滞在で、インドネシアの人々と災害の経験を共有し、今後の教育へのヒントを得た東北の先生たち。「現地の学校での交流や復興が進むアチエの姿を子どもたちに伝えることで、気仙沼の未来の姿を共に考えていきたい」と昆野光行先生（気仙沼市立鹿折小学校）。多田智恵子先生（仙台市立将監中央小学校）も、「どの国の人も災害に遭えば同じように苦しむもの。だからこそお互いに支え合って生きていくべきだと伝えたいです」と話す。

今回の研修を通じて学んだ、共に助け合っていく大切さを、先生たちが実体験として東北の未来を担う子どもたちに伝えることで、日本の復興、ひいては世界の明るい未来づくりにつながっていくのではないだろうか。

※開発教育／国際理解教育に取り組む小中高の教員を開発途上国に派遣する研修プログラム。JICA事業などの視察を通じて得た経験を、未来を担う子どもたちに教育現場で還元してもらうことが目的。JICA国内拠点の企画により、年1回地域別に行われている。インドネシアの研修の報告書はJICA東北のホームページに掲載予定。



防災教育を取り入れているバンダアチエ第一高校を訪問。東北の地図を見せながら被災状況を説明する先生たち